

VI 牛肉・豚肉の需要量推計 (平成30年度)

－調査結果を踏まえて－

- 1 牛肉の業種別需要量(推計)
 - (1) 国産牛肉
 - (2) 輸入牛肉
- 2 豚肉の業種別需要量(推計)
 - (1) 国産豚肉
 - (2) 輸入豚肉

概要 牛肉・豚肉の平成30年度業種別需要量（推計^注）

食肉の生産流通において、と畜場別、品種等別の頭数、枝肉生産量は統計として整備されている。しかし、牛肉・豚肉は品種等により、品質規格や価格帯が異なり、さらに、業種別の需要構成も異なっているが実態については明らかとはなっていない。このため、平成25年度に、食肉卸売業や需要者を対象に食肉流通実態調査を実施し、業種別の需要割合について推計を行った。本調査は前回に引き続き、平成30年度について、同様な手法により、推計を行ったものである。

前回調査の平成25年度について、振り返ると、まだ、東日本大震災から2年目であり、特に国産牛については、生産及び需要の打撃から、ようやく回復に向けて踏み出したばかりであった。一方、国産牛肉全体の供給が減少するなか、和牛を中心に枝肉取引価格は顕著に上昇し高値を維持してきた。このような需給の変化に留意する必要がある。

牛肉の平成30年度需要構成割合（推計）の概要

牛肉の需要構成割合についてみると、国産牛肉は小売向け（家計消費）の割合が7割弱と高く、輸入牛肉は業務向けの割合が2/3近くを占めている。推定出回り量は前回（5年前）と比べて、国産牛肉が6%減少し、輸入牛肉が16%と大幅に増加している。国産牛肉は小売向けの割合が微増したものの、数量ベースでは減少し、輸入牛肉は小売向けの割合が増加し、業務向けの割合は減少したものの、数量ベースでは、小売向け、業務向けともに増加している。

和牛、交雑牛、乳牛その他についてみると、「スーパー」の需要が交雑牛を除いて半数を超えている。業務向けでは「外食」の需要が多い。

輸入チルドについてみると、「スーパー」での販売量が大幅に増加し、「スーパー」と「外食」で合わせて8割を超えているのに対し、輸入フローズンは業務向けが8割を超えている。特に輸入フローズンは「惣菜・弁当」「食品製造業」、「加工食品」が併せて4割を超えており、惣菜・弁当や食肉調理品の需要拡大のなかで増加していることがわかる。

注：推計方法は、独立行政法人農畜産業振興機構調べの推定出回り量をベースとして、本調査結果の食肉卸売業者の販売先の業種別構成比を参考に推計を試みたものである。なお、本調査の食肉卸売業調査の食肉販売量のカバー率は国産牛肉が66%（うち、和牛87%、交雑牛46%、乳牛（その他含む。）50%）、輸入牛肉が70%、国産豚肉が58%、輸入豚肉が55%となっている。

表 1 牛肉の平成30年度需要構成割合(推計)

単位：％

(区分) (重量トン)	計 %	小売向け(家計消費) 計				業務向け 計					輸出 %
		スーパー %	専門小売店 %	その他小売 %	惣菜・弁当 %	外食 %	食品製造業 %	加工 %			
牛肉 計 930,000	100	47	37	6	4	52	7	32	7	7	0
国産牛肉 計 330,000	100	69	52	12	4	30	2	22	4	2	1
和牛 148,000	100	67	51	14	3	30	1	25	2	2	3
交雑牛 88,000	100	65	43	14	8	35	3	26	3	2	—
乳牛その他 94,000	100	77	64	10	3	23	1	14	6	2	—
輸入牛肉 計 600,000	100	35	28	3	5	65	10	38	9	9	—
輸入チルド 270,000	100	57	50	4	3	43	4	32	3	4	—
輸入フローゾン 330,000	100	18	10	2	5	82	14	42	14	13	—

豚肉の平成30年度需要構成割合(推計)の概要

豚肉の需要構成割合についてみると、国産豚肉は小売向け(家計消費)の割合が高く、特に「スーパー」の割合が半数となっており、「専門小売店」と「その他小売」を加えると7割近くを占めている。業務用は3割となっている。

輸入豚肉は「小売向け」が1/3、業務向けが2/3となっている。本年の調査では輸入豚肉をチルドとフローゾンに区別して推計した。特に輸入チルドの推定出回り量は前回(5年前)に比べて、33%と大幅に増加するなか、小売向けが7割を超えており、テーブルミートとして定着していることがうかがえる。輸入フローゾンは94%が業務向けで特に加工向けが59%と多い。ただし、5%と割合は少ないものの、小売向けがある。

表 2 豚肉の平成30年度需要構成割合(推計)

単位：％

(区分) (重量トン)	計 %	小売向け(家計消費) 計				業務向け 計				
		スーパー %	専門小売店 %	その他小売 %	惣菜・弁当 %	外食 %	食品製造業 %	加工 %		
豚肉 計 1,827,000	100	52	39	8	5	48	4	11	10	23
国産豚肉 計 896,000	100	69	50	13	6	31	3	10	9	9
輸入豚肉 計 931,000	100	35	28	3	4	65	5	13	11	36
輸入チルド 412,000	100	71	58	6	7	29	4	12	7	7
輸入フローゾン 519,000	100	6	5	0	1	94	7	14	14	59

1 牛肉

(1) 国産牛肉

平成 30 年度国産牛肉の推定出回り量 33 万トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、推計を行った。小売向けは 69%を占め、うち、「スーパー」が 52%、「専門小売店」が 12%となっている。業務向けでは「その他外食」が 12%、「焼肉店」が 10%、「食品製造業」が 4%、「加工その他」が 2%となっている。このように国産牛肉は家計消費向けが多いことが特徴である。

□ 和牛

平成 30 年度和牛の推定出回り量 14 万 8 千トン（部分肉ベース）について、推計を行った。小売向けは 67%を占め、うち、「スーパー」が 51%、「専門小売店」が 14%となっている。業務向けでは「焼肉店」が 14%、「その他外食」が 12%、輸出が 3%となっている。前回（5 年前）と比べて、和牛の出回り量が減少するなかで「スーパー」の割合が増加している。また、輸出も年々増加し、3%となっている。

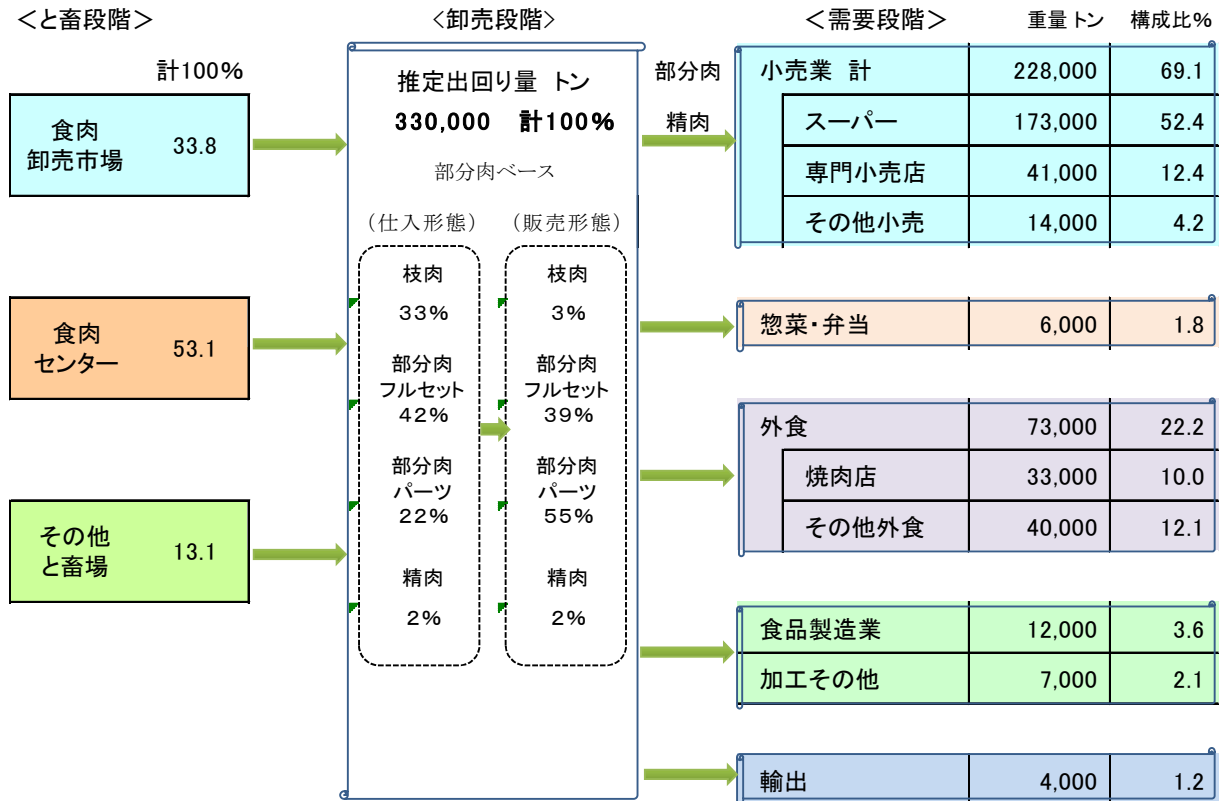
□ 交雑牛

平成 30 年度交雑牛の推定出回り量 8 万 8 千トン（部分肉ベース）について、推計を行った。小売向けは 65%を占め、うち、「スーパー」が 43%、「専門小売店」が 14%となっている。業務向けでは、「その他外食」が 16%、「焼肉店」が 10%となっている。前回（5 年前）と比べて、交雑牛の出回り量が増加するなかで「専門小売店」や「外食」の割合が増加している。

□ 乳牛その他

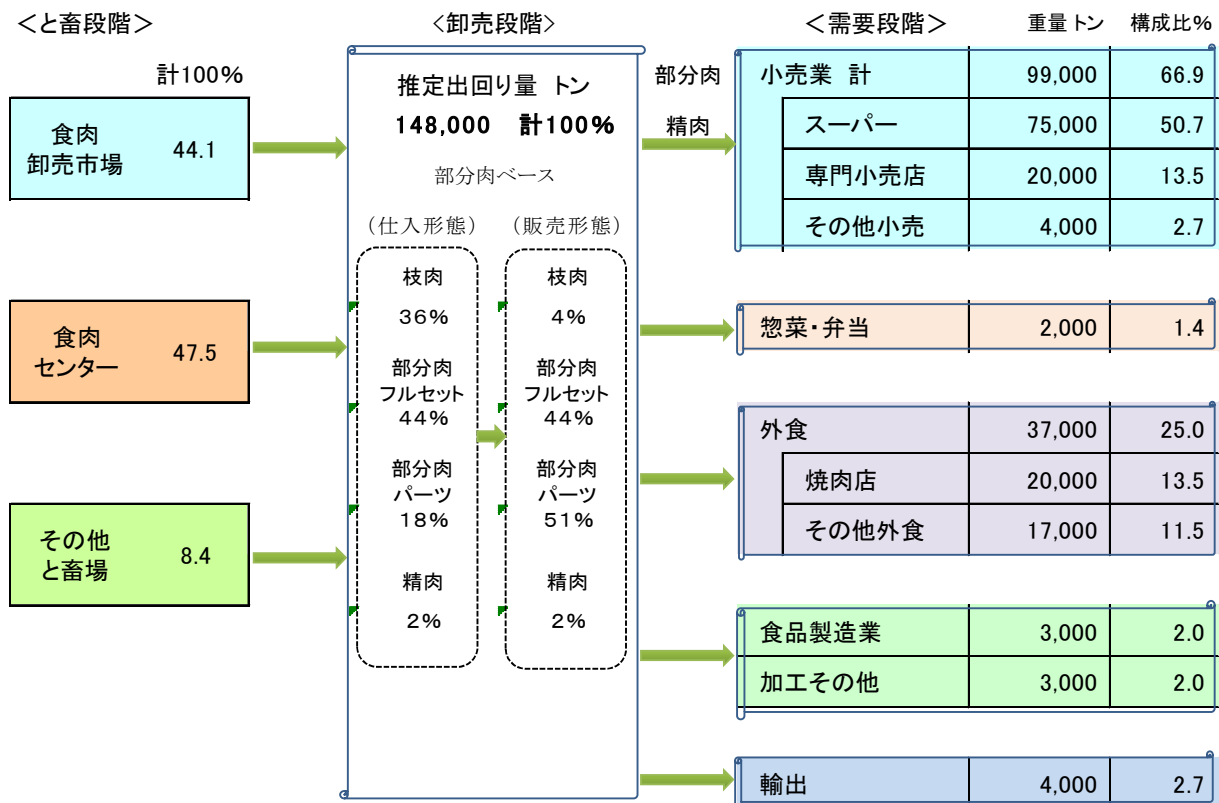
平成 30 年度乳牛その他の推定出回り量 9 万 4 千トン（部分肉ベース）について、推計を行った。小売向けは 77%を占め、うち、「スーパー」が 64%、専門小売店が 10%となっている。業務向けでは「その他外食」が 10%、「食品製造業」が 6%となっている。前回（5 年前）と比べて、乳牛その他の出回り量が減少するなかで「スーパー」、「食品製造業」の割合が増加している。

図1 国産牛肉の平成30年度業種別需要量(推計)



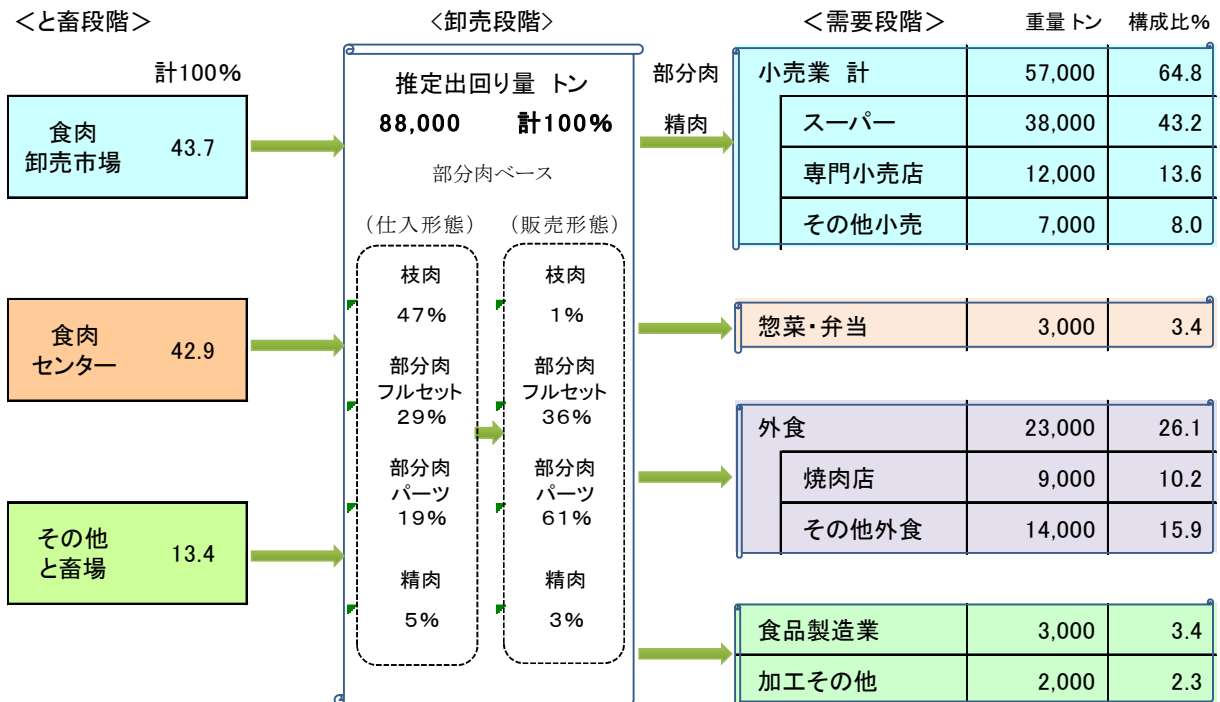
資料:と畜段階は農林水産省「畜産物流通統計」、推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」より作成

図2 和牛の平成30年度業種別需要量(推計)



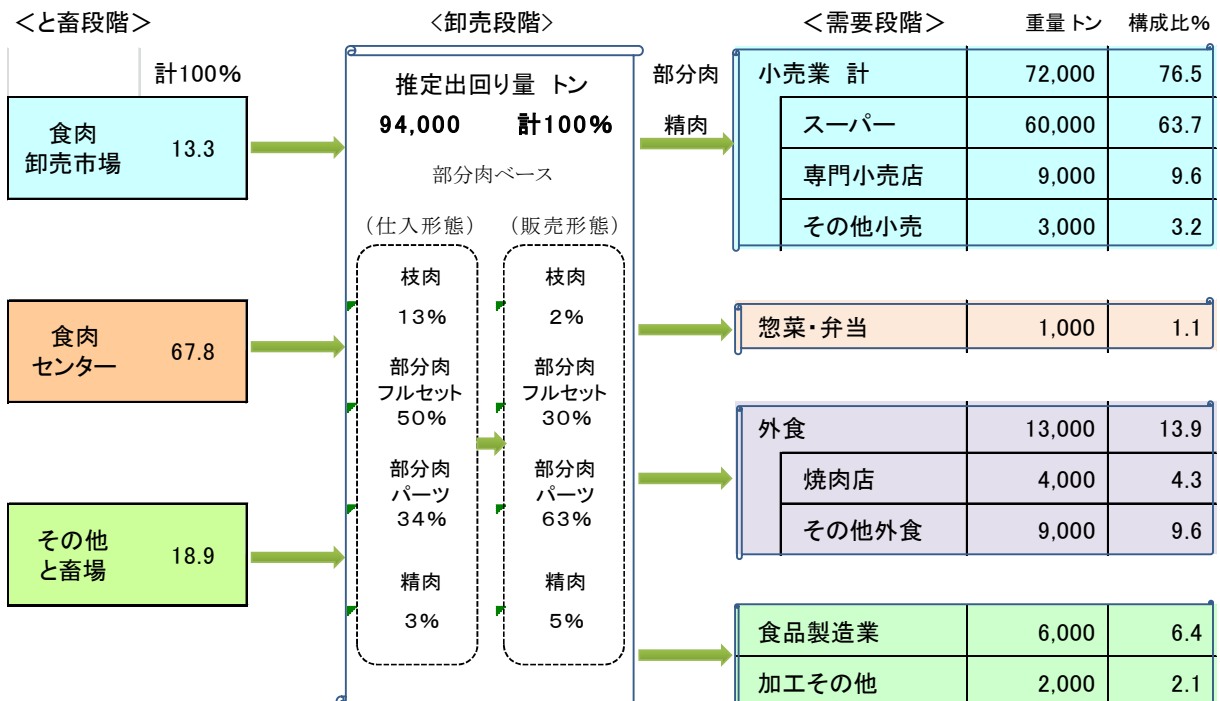
資料:と畜段階は農林水産省「畜産物流通統計」、推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」を参考に作成
注:牛肉輸出は全量を和牛肉とした。

図3 交雑牛の平成30年度業種別需要量(推計)



資料:と畜段階は農林水産省「畜産物流通統計」、推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」を参考に作成

図4 乳牛その他の平成30年度業種別需要量(推計)



資料:と畜段階は農林水産省「畜産物流通統計」、推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」を参考に作成

(2) 輸入牛肉

平成30年度輸入牛肉の推定出回り量60万トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、実態調査結果をもとに業種別需要量について推計を行った。全体では業務向けが65%、小売向けが35%となっている。このように輸入牛肉の需要は業務向けが半数以上を占め、小売向けが少なく、国産牛肉とのすみ分けがうかがえる。

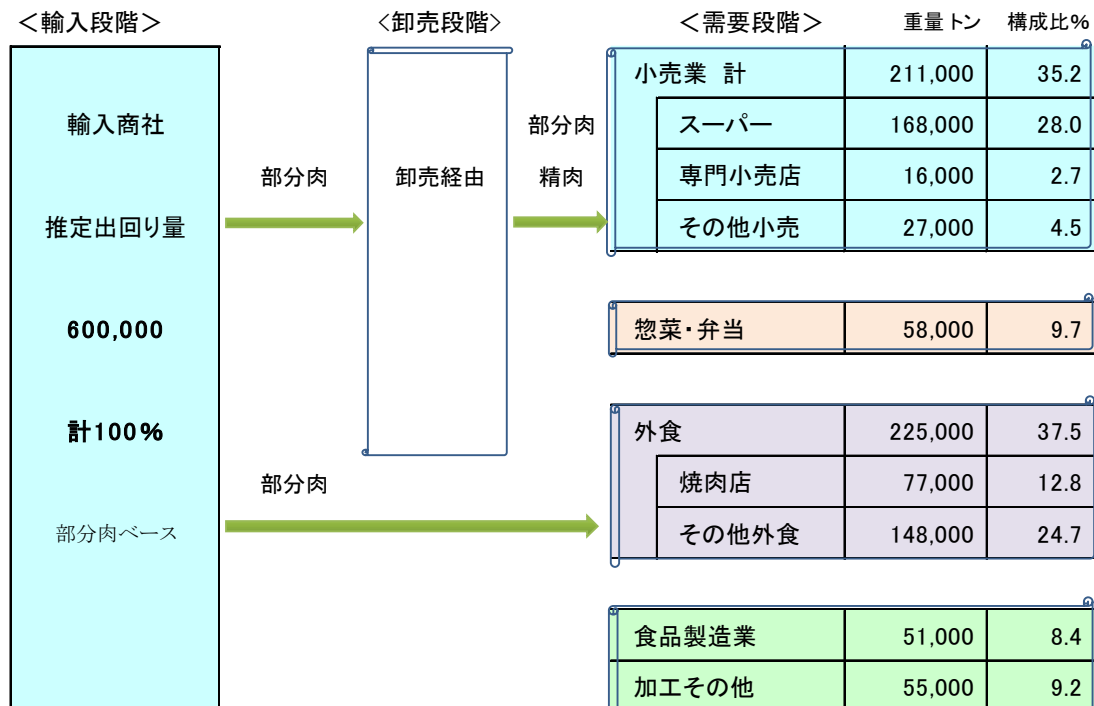
□ 輸入チルド牛肉

平成30年度輸入チルド牛肉の推定出回り量27万トン（部分肉ベース）について、推計を行った。小売向けは57%を占め、うち、「スーパー」が50%、「専門小売店」が4%となっている。業務向けでは「その他外食」が18%、「焼肉店」が14%、「惣菜・弁当」が4%となっている。前回（5年前）と比べて、輸入チルドの出回り量が増加するなかで、特に「スーパー」の需要量が大幅に増加している。

□ 輸入フローゼン牛肉

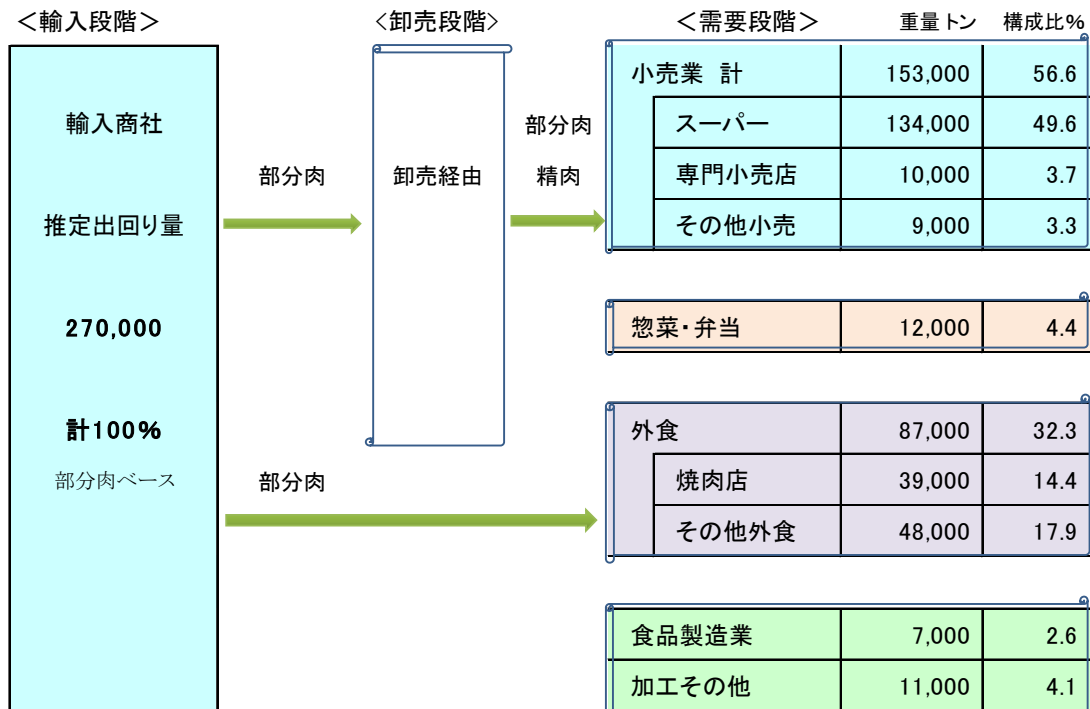
平成30年度輸入フローゼン牛肉の推定出回り量33万トン（部分肉ベース）について、推計を行った。小売向けは18%と輸入チルドと比べて少ない。業務向けは82%を占め、うち、「その他外食」が30%、「惣菜・弁当」が14%、「食品製造業」が14%、「加工その他」が13%、「焼肉店」が12%となっている。このように輸入フローゼン牛肉は業務向けが8割以上を占め、前回（5年前）に比べて、輸入フローゼンの出回り量が増加するなかで、「食品製造業」や「加工その他」が増加していることから、食肉惣菜や食肉調理品が増加していることがうかがえる。

図5 輸入牛肉の平成30年度業種別需要量(推計)



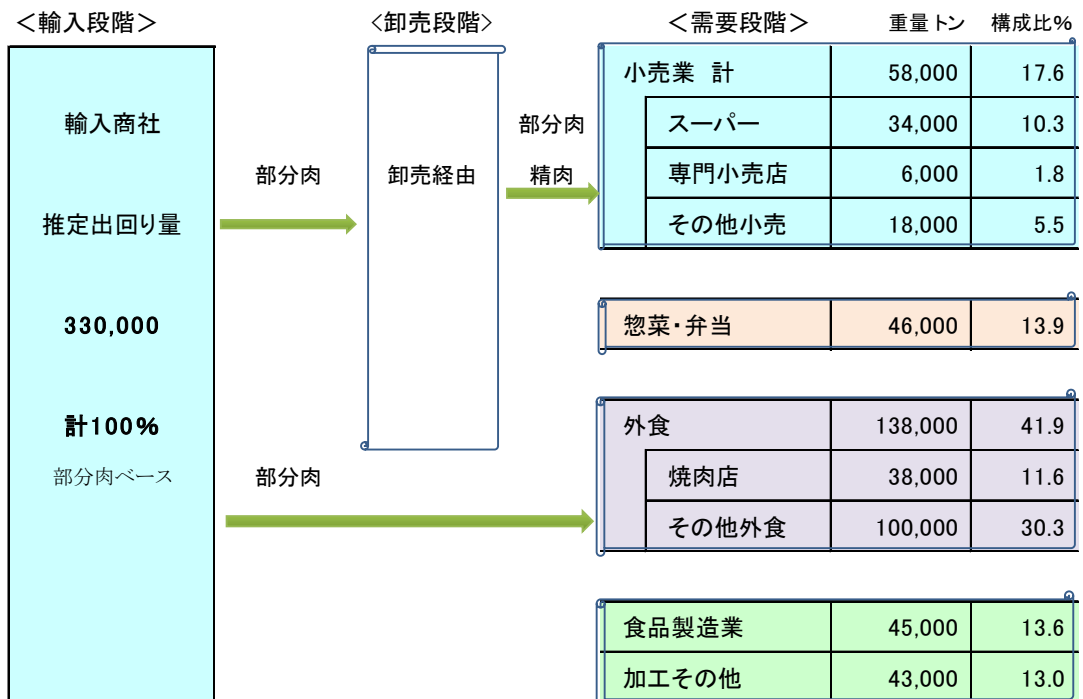
資料: 推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」より作成

図6 輸入チルド牛肉の平成30年度業種別需要量(推計)



資料: 推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」を参考に作成

図7 輸入フローズン牛肉の平成30年度業種別需要量(推計)



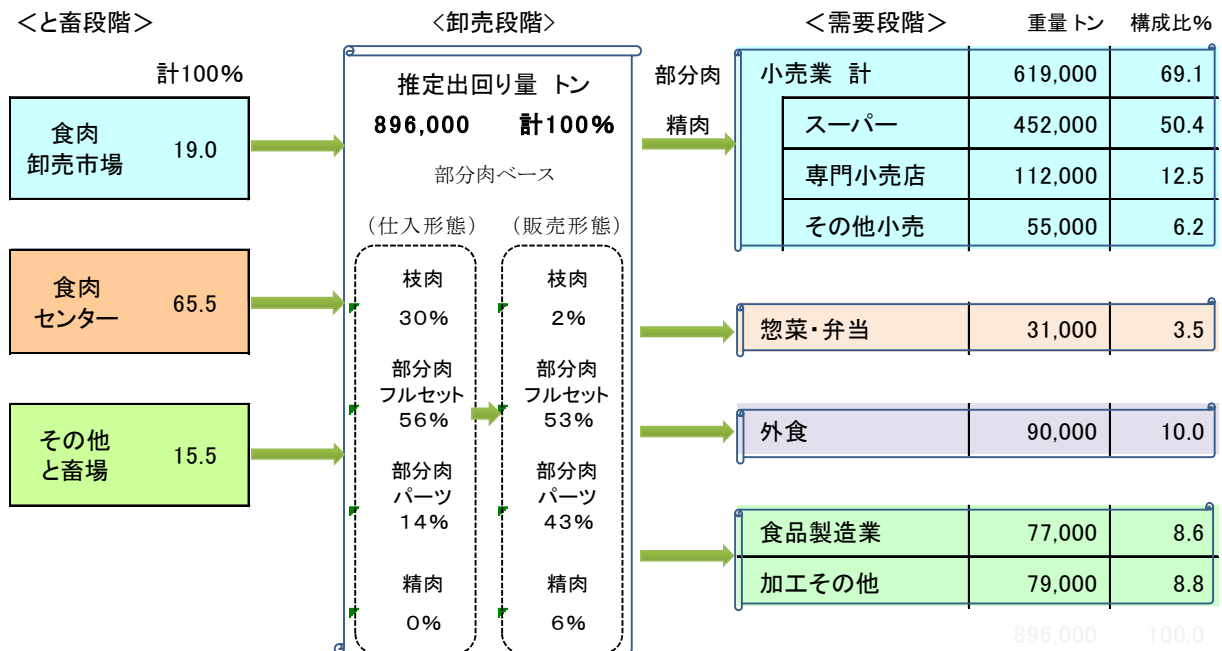
資料: 推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「牛肉需給表」を参考に作成

2 豚肉

(1) 国産豚肉

平成30年度国産豚肉の推定出回り量89万6千トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、実態調査結果をもとに業種別需要量について推計を行った。小売向けは69%を占め、うち、「スーパー」が50%、専門小売店が13%となっている。業務向けは31%でうち、「外食」が10%、「加工その他」が9%、「食品製造業」が9%、「惣菜・弁当」が4%となっている。このように国産豚肉は家計消費向けが多いことが特徴である。また、前回（5年前）に比べて、「食品製造業」が大幅に増加していることから、食肉惣菜や食肉調理品が増加していることがうかがえる。

図8 国産豚肉の平成30年度業種別需要量(推計)



資料:と畜段階は農林水産省「畜産物流通統計」、推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」より作成

(2) 輸入豚肉

平成30年度輸入豚肉の推定出回り量93万1千トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、実態調査結果をもとに業種別需要量について推計を行った。小売向けが35%のうち、「スーパー」が28%、業務向けは65%のうち、「加工その他」が36%、「外食」が13%、「食品製造業」が11%となっている。このように輸入豚肉は業務向け需要が多く、家計消費向けが少ないことが特徴である。

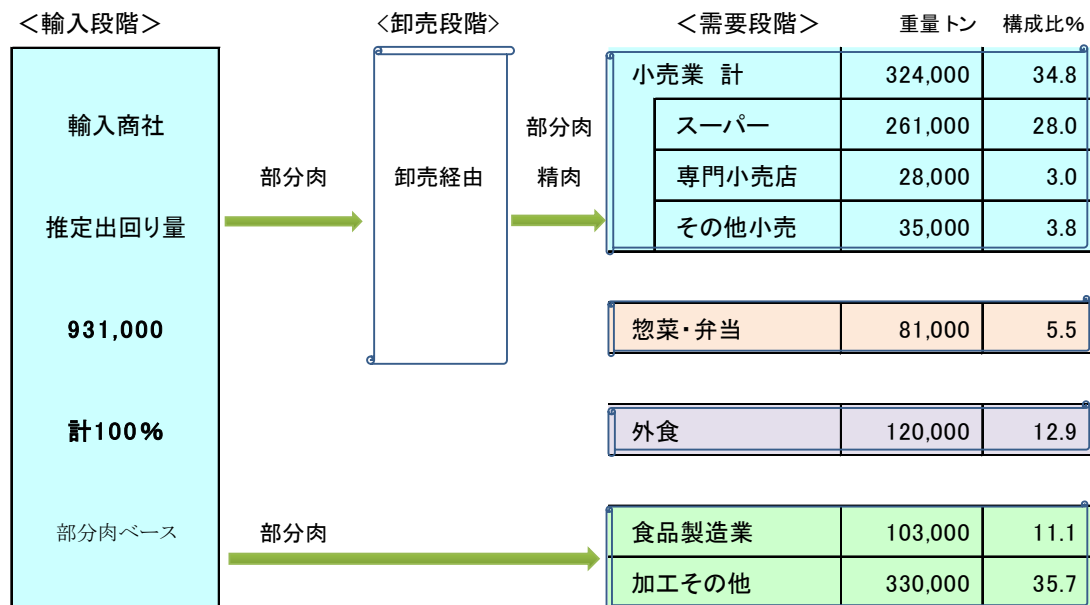
□ 輸入チルド豚肉

平成30年度輸入チルド豚肉の推定出回り量41万2千トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、推計を行った。小売向けが71%のうち、「スーパー」が58%、業務向けは29%のうち、「外食」が12%、「食品製造業」が7%、「加工その他」が7%となっている。このように輸入チルド豚肉は、5年前と比べて輸入量が33%と大幅に増加するなか、小売向けが7割を占め、テーブルミートとして定着していることがわかる。

□ 輸入フローゼン豚肉

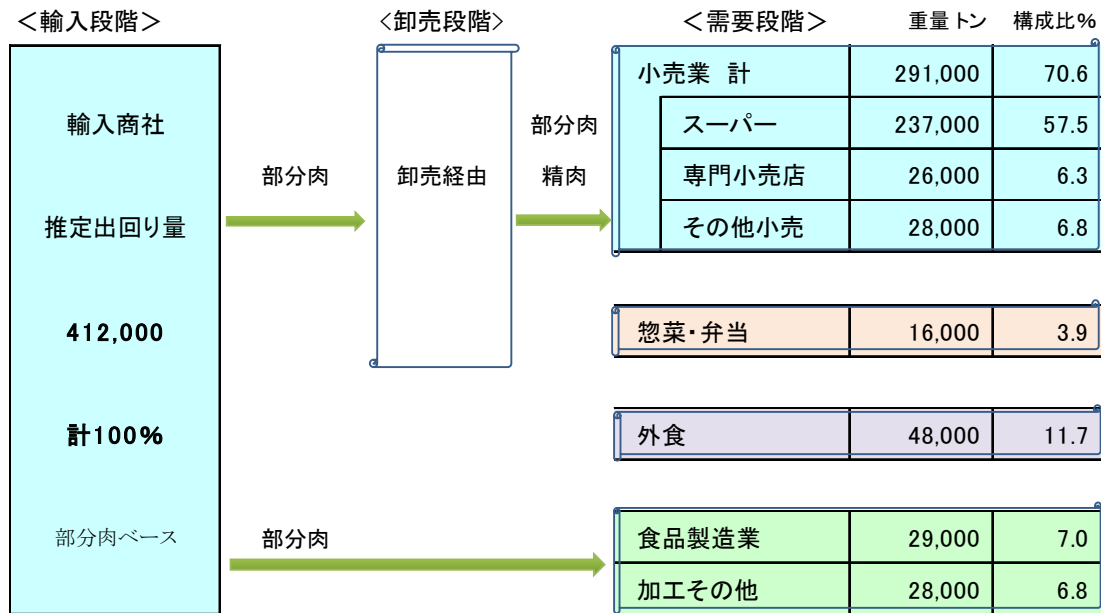
平成30年度輸入フローゼン豚肉の推定出回り量51万9千トン（部分肉ベース、農畜産業振興機構調べ）について、推計を行った。小売向けが6%と少なく、業務向けは94%のうち、「加工その他」が59%、「食品製造業」が14%、「外食」が14%、「惣菜・弁当」が7%となっている。このように輸入フローゼン豚肉は、5年前と比べて輸入量が17%と大幅に増加するなか、業務向けが9割以上を占め、うち、食肉加工品のほか、食肉惣菜や食肉調理品が増加していることがうかがえる。

図9 輸入豚肉の平成30年度業種別需要量(推計)



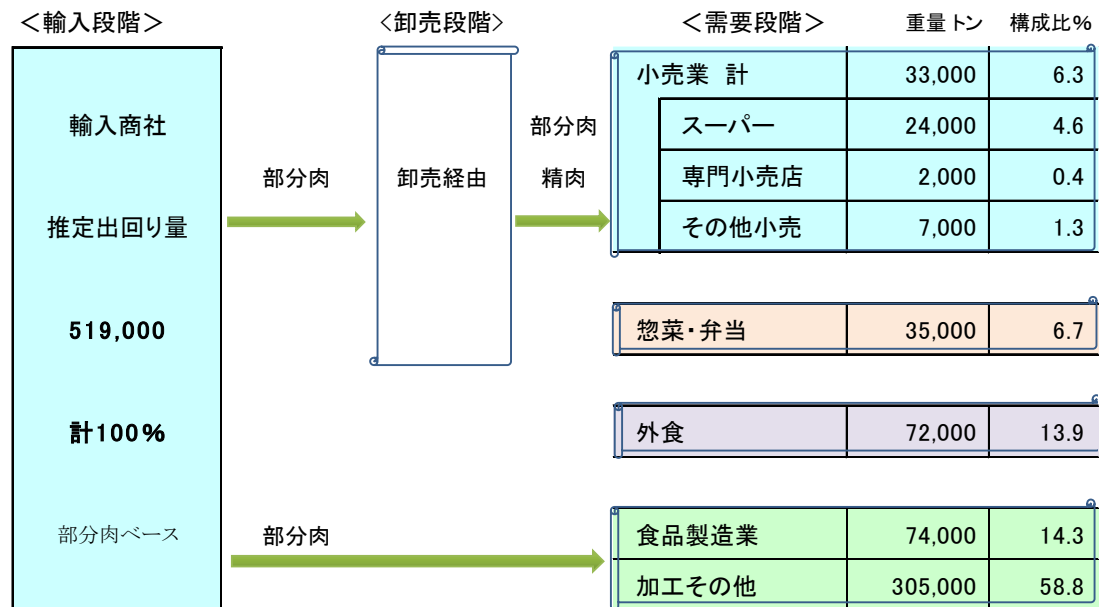
資料:推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」より作成

図 10 輸入豚肉チルドの平成30年度業種別需要量(推計)



資料: 推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」より作成

図 11 輸入豚肉フローズンの平成30年度業種別需要量(推計)



資料: 推定出回り量は独立行政法人農畜産業振興機構「豚肉需給表」より作成

